

第 1 章

私立大学化学系教員連絡協議会（私化連）

1.1 私立大学化学系教員連絡協議会が生まれるまで

私立大学化学系教員連絡協議会

顧問（第6代会長） 吉 弘 芳 郎

（明治大学名誉教授）

1955年（昭和30年）頃から日本では工業生産の伸びとともに経済も伸び、1956年（昭和31年）の経済企画庁の経済白書で「もはや戦後でない」と記載されるようになった。

この経済発展を支える多くの技術者、研究者の育成が急がれた。しかし当時は、理工系学部のある私立大学は少なく、技術者、研究者の育成は国立大学の理学部や工学部に依存していた。これらの学部の学生定員を急に増やすのが困難な状態であった。

私立大学の多くは文科系学部で構成されていたが、これに工学部や理工学部が創設され、技術者の育成が行われた。文科系大学から創設された工学部や理工学部では、教育や研究の進め方が文科系学部になかなか理解されず創設された理工系の教員が苦勞することもあった。理工系学部の学生の教育は優れた指導者の下での実験や実習が必要で、これについての費用が必要となる。

しかし国からの私学に対しての財政的支援は少なく、これらを学生の授業料に頼ることになった。それぞれの私立大学が可能な限りの入学者を入学させることになり、これが教育、研究の面で私立大学に共通する問題の種となった。

実験、実習など学生が体で体得する科目が基礎となる化学系の学科では、深刻な問題であった。

大学の財政事情が根本の原因であるので、いくつかの学部を有する私立大学での、理工系学部の一学科では解決の方法もなかった。

大学設置基準により、大学の教員組織、教員の資格が厳しく定められて、各大学ではこれを遵守している。私立大学の教員の教育、研究の負担は国立大学に比べて大きく、これが助手たちのいろいろな不満のもととなった。この不満は、学科単位では対応しきれない状態となった。

関東地区の私立大学の化学系では、これらの問題にどのように対応しているかを話し合うことが望まれた。

1961年（昭和36年）日本大学（故）永井彰一郎先生の呼びかけで、関東地区の私立大学の理工系化学系の教員が集まり、研究所を見学して私立大学の教員が交流する場が設けられたことがあった。この経験を基に、中央大学から都下の私立大学の化学系学科に話し合いの呼びかけが行われ

た。

この呼びかけで日本大学理工学部工業化学科、東京理科大学工学部工業化学科、東洋大学工学部工業化学科、明治大学工学部工業化学科が中央大学理工学部工業化学科に加わって5学科で各大学での実情を本音で話し合った。本音での話し合いが重要であることが認識された。そして現場の様子を本音で話し合うため、議事録を残さないことにした。

この話し合いで私立大学化学系の教員の連絡協議を組織化することが望まれた。呼びかけの中央大学、日本大学、明治大学、東京理科大学が幹事校となり、幹事校の互選で当番校を決めた。当番校が化学系の大学に連絡その他の役務を行うこと、幹事校や当番校は、各大学持ち回りにするなど、会の運営方法などの骨子を決めた。

初代の会長を（故）永井芳男先生にお願いすることにした。1976年（昭和51年）、会の名称、会員資格、事業、運営、会計、規約の原案が固められた。

1977年（昭和52年）の設立総会で私立大学化学系教員連絡協議会規約が承認され、1977年（昭和52年）10月1日よりこれが実施された。その後若干の修正が行われたが現在までこの協議会は継続している。

1.2 私にとっての私立大学化学系教員連絡協議会（私化連）

私立大学化学系教員連絡協議会

副会長 香川 詔士

（関東学院大学名誉教授）

1974年（昭和49年）の6月頃、大学の学園紛争も下火になりかけ、これからの大学教育を如何に遂行していくかを考えようという気運があったように記憶している。そして、私立大学の化学系の教員が集まってお互いの情報交換をしようではないかと中央大学の先生からのお誘いが本学の当時の学科長にもあったようである。学科長からまだ専任講師になったばかりの私に出てみなさいとの指示があった。これが私にとっては専門の化学工学以外の先生方と始めてお話しする機会になったように思う。最初の会合は確か中央大学理工学部の会議室で5～6大学の先生方が集まり大学の現状として実験補助員（実験助手）の状況を報告し合ったように憶えている。そして、これが私立大学化学系教員連絡協議会（略称：私化連）の誕生になった。

翌々年の10月に正式に私化連が誕生し、この会に出席して多くの先生方と知り合うことができたことは私の大きな財産となった。特に、この会の発起人のお一人であった中央大学の中田常雄先生（私化連元会長）は私立大学出身で母校に勤められており、私と全く同じような境遇であったことからいろいろとお世話していただいた。先生からは当時、多くの私立大学においては常に国立大学から教授が天下ってくる中で母校出身者はどのように生き抜いていくか、また学生をどのように指導するか、などについて教わったように記憶している。先生は学生の就職においては企業の方々に学生の良いところだけを強調するというよりは欠点を含め、如何に御社で活躍できるかを話す姿勢と、学生には自分で即断できるように的確なアドバイスする姿には教えられることが多々あった。

一般的に大学の教員は、自分の研究を第一と考え、学生を指導するという大義名分で学生をアシスタント代わりに使い、自分の研究の成果を重視する人が多いと当時思っていたので中田先生にお会いし、私学の先生のあり方を教わったような気がした。先生が私に、「君は若いのであるから、学位は取れるときに取ちなさい。そして、教授という座には着きたくて着くのではなく、周囲から着いてくださいといわれるようにしなさい。私も一時は大いに悩んだこともあったが、その時はもう歳でした。私は学生の進路指導に徹することにした。」としみじみと語ってくれたことが昨日のように思い出される。

この私化連では各大学の表の情報よりも裏というか本音の情報を得ることができると共に、それぞれの大学が将来に向けて進もうとしている道や企業の建前ではなく本音の考え方、加えて各学会の裏話なども知ることができた。そして、1980年代前半の18歳人口の急増、10年後の急減期に理工系学生の減少に関して関西の化学系大学と1991年に甲南大学で第一回を、翌年の1992年に第二回関東・関西私立大学化学系学科合同懇談会が開かれた。その後は関東では私化連が、関西では関西私立大学化学系学科懇談会（関私化懇）が開催されているようである。

私はこの私化連で得た情報を多く持つことによって自分の学科のあり方を種々提言することがで

きた。それが逆に学科内においては徐々に煙たい存在になっていったのではないかと考えている。今思えば、井の中の蛙大海を知らずの諺通り、情報量の少ない人は自分の情報の範囲内での判断しかできず、何事にも消極的になり現状維持が最適であるとの論調が多くなり、学問的に深さを持っている先生でも非常に視野の狭い思考形態で学生を指導することになる恐れがあったような気がする。この私化連も40年間継続されており、私は設立当初から関わっていることから、現在は副会長という要職に就いているが、設立当初色々なことを教わった先生方はもう殆どの方が退職されたりお亡くなりになったりして、設立当初のように化学系学生をどのように教育するか、また、企業が望む学生像に合わせるためにこんなことを行っている、というような裏話的情報交換の場が段々と薄れつつあるように感じている。そして、私化連そのものが学会のように教育よりも研究に主体を置いているという雰囲気は漂い始めているように思う。

私立大学は、それぞれに創立者による建学の精神があり、教育・研究に各大学で特色があるはずであるが、研究に主体を置くようになると先生方の力はその大学の特色ある教育に力を入れることが希薄になってくるのではないか。今後は今よりも大学の大衆化は進むと共に専門性を追究するよりも教養性に重きを置かざるを得ないようになると思う。その時に学会ではない情報交換の場としての私化連の役割が私立大学の教員にとっては貴重な場になると思う。こんなことを考えながら私化連のますますの発展を祈念している。

オピニオン 1 当学科が幹事校だった年、会長の中田常雄先生が会場の下見に来られ、ご案内した私に学生のことを第一に考えなさいと言われました。発達障害やその他の原因でコミュニケーションに苦労している学生が私の研究室には毎年配属されて来るが、その言葉以降そういう学生から逃げない覚悟を持てるようになった。

オピニオン 2 今日各大学の情報は、各大学のHPに詳細に記載されている。以前学部で学生に学力向上のための新たな試みを企画し、各学科に各大学の実情を調査し、学部として取り組むか否かを検討したとき、各学科の担当の先生は各大学のHPからの情報で実施すべきとの結論となった。しかし、数年後実施したが経費に見合った成果は得られなかった。つまり、HPに公開されている情報は全て成功していると記載されている。各大学の実情は山あり谷ありで建前ではなく本音の情報は人間関係によって得られるものであるから、この私化連は今後とも本音の会として残って欲しい。

オピニオン 3 関東地区の私化連と関西地区の関私化懇（関西私立大学化学系教員懇談会の略称）とは今後「全国大学化学系教育研究集会」（偶数年の隔年開催）開催日の前後で合同懇談会を開催することも検討して欲しい。この全国大学化学系教育研究集会は当時の文部省との共催で昭和38年に始まった全国大学工業化学・化学工学合同研究集会を発展的に改称したもののようである。

オピニオン 4 次代の私学化学系学科に希望をもつ

「私化連40周年記念誌」は所謂、これまでの本音のやり取りがまとめられているため婉曲表現が少なく、その文量の割に読み終えるまでに時間がかからないであろう。それは切実であり、その時々との関係教員の苦悩が手に取るように共感できる。記念誌の中に、私化連が発足当初から取り上げていた助手問題は自然消滅的に時間が解決したとあるが、実のところは解決したのではなく結局泣き寝入りだったと残念に感じる。全体として、40年間多くの方々が私学の化学系学科の教育・研究環境を向上させるために努力されてきたことと、殆どの課題があまり解決できないまま今日まで至っているということがわかる。このように書くと悲観的になってしまうが、私はこれまでの私化連の活動を高く評価したい。それは、世の中の動向とともに大学の化学教育・研究が同期して揺れ動く中、それぞれの時期での課題を具体的にきちんと整理することに成功しているからである。本音であるが故に議事録を残さない形態で進められてきたわけだが、それにも関わらず、明確にこれらが整理されている。大変な作業であったことが想像できる。役員および記念誌の執筆者の先生方に感謝申し上げたい。これから我々が課題として何を対象に、どのような方法で対処していくかを考える上でこの記念誌は大きな貢献をもたらすであろう。

記念誌を読んでいると、いくつかのフレーズが何度も出てくることに気づく。例えば、“それぞれの学科で事情が異なるため…”、“教員の過度な負担が原因で…”、“私学にはそれぞれ建学の精神があり…”など。これらはいずれも、私化連に加盟している化学系の諸学科がなかなか足並みを揃えて行動を取れないでいる原因である。私学化学系学科を今後も増やしていけば、同じ状況にいる学科もそれなりに増え、同じ悩みを共有しながら解決の糸口にたどり着くことができるようになることも考えられる。が、複数の項目で悩みを同時に共感しながら協力できるようになれる学科がそんなに多く現れるとは思えない。それよりも、上述したフレーズの例は現在加盟している化学系学科に共通しているわけで、少数の学科にしか共有できないような細部の事情にあまりこだわらず、もっとざっくりとした最大公約数的な切り口で、私化連全体で進められるような活動が考えられれば大きな力に育つのではないだろうか。これまでに大した貢献もせず、大変恐縮しながら格好のよいことを書かせていただきました。しかしながら、この40年間に私学化学系学科の将来を憂慮されてきた方々の気持ちの伝わる記念誌を読ませていただき、このような感想を思った次第です。また、この記念誌を読んで次代に希望をもつことのできた方が私の他にも必ずやおられることを信じて疑わない。